

2005年度ワークス研究所の研究について

大久保 幸夫
リクルートワークス研究所 所長

1999年1月1日にワークス研究所を立ち上げて8年目になりました。その間、民間研究所として、「ひとりひとりが生き生きと働くことができる社会をつくるために貢献しよう」という志のもと、ひたすらに研究活動や調査活動を重ねてきました。特に2003年からは毎年1つの大きな研究テーマを設け、研究所が一体となってその問題を多角的に研究するという戦略をとり、2003年「正社員・非社員」、2004年「プロフェッショナル」そして、今回2005年「誰もが働きやすい組織」と、チャレンジしてきたのです。

このような研究重点化ということは、長期にわたる研究の積みあげを困難にするという欠点はありますが、反対にその時代に則した研究を掲げることができることや、毎年新鮮な気持ちで研究テーマに向き合うことができるという利点もあります。振り返って見れば、正社員・非正社員、プロフェッショナル、そして誰もが働きやすい組織（＝ダイバーシティ、あるいは女性・高齢者活用）というテーマは、どれも時宜を得たものとして大きな反響をいただき、社会に役立つ研究成果が挙げられたのではないかと考えております。

同時に、研究活動の進展にあわせて、研究成果のまとめ方の改革にも着手しました。研究者個人々の報告書作成と『Works』誌上での発表に頼っていたものを、年に1度のシンポジウム開催による対話型発表と、この「Works Review」への掲載というスタイルを加え、本

誌、論文誌、シンポジウムという3本立てに整理しました。これによって、研究員は納品負荷が高くなりましたが、より多くの方々に研究成果を活用していただけるようになるものと思っています。

そもそも、民間研究機関であるワークス研究所の研究は、役に立ってこそその研究だと考えています。単に真実を明らかにするだけでなく、「企業経営の問題解決に役立つ」「個人のキャリアデザインに役立つ」「政策立案に役立つ」と言っていてこそ、価値があると考えています。私はよく「Profession Value」と「Academic value」を両方とも得よう、と研究員に発破をかけていますが、人材という重要な研究テーマを追いかける以上、欲張りだと思っています。この「Works Review」はそのうちの、「Academic Value」を目指したものであるということになります。

さて、2005年度のテーマでありました「誰もが働きやすい組織」について少しお話をしておきたいと思います。

1つめの視点は、ダイバーシティ・マネジメントです。多様な人々をいかにして企業はマネジメントしていくのかという論点で、特に男性正社員に全く手を触れず、女性や高齢者や外国人を周辺労働力として活用するようなダイバーシティ・マネジメントになってはいけないという思いから研究をはじめました。壮大なテーマであるため、1年間のなかでは問題提起にとどまってしまいましたが、「ユニバーサル組織」

というネーミングとともに、西山研究員・益田研究員による報告を掲載しています。

2つめの視点は、女性の活用です。女性がどのようなキャリアパスを描くのかを明らかにして、出産というイベントをいかに乗り越えて継続的に働けるかを研究した、徳永研究員、小泉研究員、奥村研究員、畑谷研究員の報告と、女性リーダーの創出に視点をあてて、どのような機会が女性をリーダーに育てるのかを分析した石原研究員の報告を掲載しています。女性の活用、登用に関していくつかの視点を提供できたのではないかと思います。

3つめの視点は、高齢者の活用です。定年退職以降、どのように職業価値観が変化するのかという論点と、どのようなワークモデルがあるのかという論点に絞り、笠井研究員、福島研究員、高橋研究員、松本研究員の報告を掲載しています。特に今回、編集委員による審査で最優秀論文賞に選ばれた福島研究員の報告では、「無理なく、役立つ」という高齢者の就労ニーズを見つけ出し、4つのワークモデルを提案しています。その他、継続的に研究を続けている若年のテーマでは、能力と意欲という観点から若年問題を捉え、角方研究員、辰巳研究員、岩脇研究員の報告を掲載しました。人材ビジネス研究の領域では藤川研究員の報告を掲載しています。

論文として掲載した報告については、WEB上で英文サマリーもご覧いただけるようにしましたので、併せてご利用ください。

今回、創刊号ということもあり、ずいぶん戸惑いもありました。ジャーナリスティックな表現に慣れている研究員には、敷居の高い仕事であったと思います。しかし、幸いにして、以前よりワークス研究所の研究活動に対してさまざまなご示唆、ご協力をいただいていた、矢野眞和氏、渡辺三枝子氏、佐藤博樹氏、守島基博氏という素晴らしい4名の編集委員のご就任が得られて、なんとか形にすることができまし

た。また、ワークス研究所のOBでもある山口大学の内田恭彦氏には、研究過程で多くの研究員がアドバイスをもらいました。

今後、さらに改善を加えながら、来年以降も発行を続けていきたいと考えています。

また、2005年度は客員研究員制度を取り入れた初年度でもありました。常勤の研究員に加えて、多くの非常勤研究員（＝客員研究員）を得たことは研究活動に広がりを生みました。

私たちの研究活動は、多くの企業の皆様、多くの研究者の皆様のご協力のもとに成り立っています。末筆ではありますが、この1年間のご協力に感謝し、お礼を申し上げます。本当にありがとうございました。